創立1880年
東京YMCA
2013 9 月号
発行所　公益財団法人東京ＹＭＣＡ　発行人　廣田光司
135-0016　東京都江東区東陽2-2-20　電話　03-3615-5562
URL http://tokyo.ymca.or.jp

東京ＹＭＣＡの使命

東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

企業が支える　東京ＹＭＣＡ

賛助会　45年継続10社などに感謝状

「賛助会年会・アドバイザー会」を7月18日、千代田区の学士会館で開催。東京ＹＭＣＡを支える賛助会企業21社と、アドバイザー、評議員など計50人が集まった。この「年会」は年に一度、日ごろのご支援に感謝し、東京ＹＭＣＡの事業活動内容について報告するために行っている。また、継続5年、10年などの節目を迎えた会員を表彰しており、今年は左記の24社に、北城恪太郎賛助会会長（日本アイ・ビー・エム株式会社相談役）から感謝状が贈呈された。

賛助会は１９７０年３月に発足、今年で44年目を迎える。左記に「継続45年」として表彰された10社は、１９６９年から会の発起人として尽力くださった企業である。永年にわたって、物心両面でお支えいただいたことは、感謝の一言に尽きる。

表彰式の後には、北城会長から『青少年の育成』と題し、その重要性について講演いただいた。

懇談の席上では、東京ＹＭＣＡの東日本大震災復興支援活動の近況が報告されたほか、「山中湖センター90周年記念施設整備募金」「ＹＭＣＡ国際協力募金」「フレンドシップファンド」についても、担当委員・職員からアピールがされた。終始なごやかな雰囲気のうちに終了した。

2013年度　賛助会表彰法人

【継続45年】
- ウシオ電機株式会社
- サントリーホールディングス株式会社
- 株式会社資生堂
- 株式会社東芝
- 株式会社日清製粉グループ本社
- 株式会社日立製作所
- 株式会社三井住友銀行
- 株式会社三菱東京ＵＦＪ銀行
- ユアサハラ法律特許事務所
- ライオン株式会社

【継続40年】
- 木村農産商事株式会社
- 株式会社タカサゴ
- 医療法人財団　福音医療会

【継続35年】
- 株式会社菓匠榮久堂

【継続30年】
- 山崎製パン株式会社

【継続25年】
- 株式会社ウテナ

【継続15年】
- 株式会社花藤
- 有限会社バンノ・インターナショナル

【継続10年】
- 三信電気株式会社
- 全豊興業株式会社

【新入会員】
- ＡＤＥＫＡライフクリエイト株式会社
- 株式会社高島
- 日本スタディ・アブロード・ファンデーション
- 株式会社レクトン

賛助会とは

東京ＹＭＣＡを支援する企業・団体による組織で、現在141の法人が登録。年会費による支援の他、チャリティーランやバザーなどへの参加や協賛など、多岐にわたって協力いただいている。

そもそもＹＭＣＡは1844年ロンドンで創立以来、会費や寄付によって支えられている団体である。東京ＹＭＣＡの歴史を省みても、関東大震災後の本館再建や、江東、山手などブランチの設立、また国際協力活動や、障がい児の活動などは、常に募金によって展開されてきた。

賛助会は、こうした募金活動を組織化するために、財界の有力者たちが発起人となり、1970年に設置された。初代の会長は、東京オリンピック組織委員会会長を務められた安川第五郎氏（安川電機製作所）である。発会式で安川氏は「青少年の健全育成をはかり、教育をその本姿に立ち返らせるには、ＹＭＣＡに期待すべきであると信じる。ＹＭＣＡの使命は極めて大きい。この責任を果たすために各位の協力を願いたい」と、力をこめて語られた。その思いは現在に至るまで広く受け継がれ、ＹＭＣＡの事業・活動、拠点の一つ一つを生み出し、多くの青少年たちを育てている。

1970年の賛助会発会式

＜東京ＹＭＣＡ午餐（ごさん）会＞

午餐会は、昼食を囲みながら各界の著名士の講演を聴く会で、1920年代から開催している。70年からは賛助会が主催し、その活動の一環として毎月1回欠かさずに継続している。今月で659回を迎えた。

＜賛助会　入会のご案内＞

東京ＹＭＣＡの主旨に賛同し、賛助会員になってくださる企業等法人を募集しています。
会費は年額3万円から50万円まで6種類。お問合せは賛助会事務局（tel.03-3615-5568）まで

東京ＹＭＣＡ賛助会 会長

北城恪太郎氏　講演

青少年の育成

― 多様な教育で 自信を育てる ―

日本アイ・ビー・エム株式会社相談役。国際基督教大学（ＩＣＵ）理事長。2003年～2007年経済同友会代表幹事。著書に『経営者、15歳に仕事を教える』（文春文庫）。2011年から東京ＹＭＣＡ賛助会会長を務める。

どこの国でも、社会を支えるのは人材であり教育です。そのため教育に関してはさまざまな意見があり、検討がされていますが、私は、日本の教育問題のいくつかは、大学教育に起因していると思っています。

まず日本の大学は、入学試験の点数で入学者を選びます。多くの私立大学の入試科目は２～３科目ですから、受験生は３科目の点数のために勉強します。そしてまた、有名な大学への合格者数で高校の評価も決まります。大学入試という一元的な評価基準が、高校以下初等中等教育にも影響を及ぼしているわけです。

ご存知のようにアメリカの大学には入学試験はありません。全国の学力テストによって、ある程度の学力評価はされますが、点数の上から順にとることはしません。高校時代にどんなことをしたか、大学に入って何を勉強したいかが問われます。ですから高校生は３科目だけの成績をよくしようという勉強はしません。

また、日本の大学生は入学後あまり勉強しません。「日本の大学生の勉強時間は授業も含めて1日平均３時間半」という調査結果もあります。高校３年生は６時間、小学６年生でも５．２時間です。日本の大学は教育する仕組みが弱い。一方アメリカでは、教授への昇進に教育の成果が問われるため、教える先生も必死です。私が留学した大学でも、毎週レポートを出すなど、ほとんど徹夜で勉強しなければなりませんでした。正に大学が、社会のリーダーを育てる教育機関として機能していました。

自信がもてない日本の子どもたち

また、他の調査で、日本の子どもたちの自己肯定感について調べたところ、「私は価値のある人間だと思うか」という質問に対し、日本は「そう思う」「ほぼそう思う」を合わせて36％でしたが、アメリカは89％、中国88％、韓国75％といずれも2倍以上でした。「自分は優秀だと思うか」という質問に対しても、日本は15％。アメリカは87．５％、中国67％、韓国47％と、他国を大幅に下回っています。「自分にはできることがたくさんある」「どんなに失敗しても落ち込まない」「生徒によく発言させる授業が好きか」などの質問にも、日本だけが他国の半分以下の数値でした。（財団法人日本青少年研究所２０１２年４月発表より）

日本の子どもたちは、テストの点数が高い、ほんの一部の子ども以外、自己肯定感をもてずにいます。テストの成績がよくない子どもは、ほめられることもなく、自信をなくしてしまっている。それに対し他の国では、テストの点が一番でなくても、一人ひとりの子どもには価値があると認められ、ほめられて育てられていると思います。

すべての子をほめて育てる

子どもはほめて育てなければなりません。子どもたちは一人ひとり、何かいい所、優れた能力をもっています。クリスチャンはこれを「賜物」と言います。神様から与えられた能力で社会の役に立ち、貢献していくことが、働くということです。ですから、子どもにはいろんな経験をさせながら、いい所を認めて、ほめて育てる必要があります。

東京ＹＭＣＡは青少年の育成のために、さまざまな活動をしています。キャンプ、語学、ウエルネス、専門学校など、子どもたちの多様な能力を伸ばす活動をしています。また、震災の支援活動や、国際協力、不登校児支援、障がい児支援なども行っています。こうした活動を続けていくために、賛助会皆様のご寄付が大変役に立っています。心から感謝しますとともに、引き続きのご支援をお願いいたします。

（まとめ　広報室）

赤▽三角

創立一００周年事業の一環として、東京ＹＭＣＡ山中湖野外福祉センターの改築献堂式が行われた１９８０年11月８日、賛助会募金委員長の本田宗一郎氏（本田技研工業）が出席してくださった。秋晴れの中、まっ黄色のオープンカーを自ら運転して現れた氏は、岩井要氏設計の施設の出来栄えに満足の意を示された。▼やがて行われた献堂式の礼拝説教は、東京ＹＭＣＡ商工青年クラブ出身で日本基督教団韮崎教会の佐藤仁牧師であった。最前列に座っておられた本田氏は、式が終わると胸のハンカチで目頭をぬぐわれ「イヤー良い話だった、最近こんなに感激したことはない。有難う。」と言われるとお茶も飲まずに次の予定へと向かわれた。▼三井銀行の小山五郎氏が会長の時代、経団連会館で行われた賛助会年会の席上、東芝の佐波正一氏が食前の感謝の祈りをされた。会が終わると小山会長は「佐波君の祈りには感銘した。会長は信者でなければ務まらない、すぐ代わってもらう。」と言われ、国際基督教大学（ＩＣＵ）の次期理事長にも指名され固辞される佐波氏に後任をお願いしたのであった。▼佐藤牧師の説教といい、佐波氏の祈りといい、神からの賜物を預けられた人の言葉は、人をして真理へと目覚めさせる力を与えられていることを教えられた思いであった。

（東京ＹＭＣＡ元総主事　小林道彦）

ソウル・台北・東京から若者12人
石巻で被災地支援 ボランティア

「ソウル・台北・東京ＹＭＣＡ指導者協議会（通称ＳＴＴ）」の提案により、８月５日から11日、「ＳＴＴ東日本大震災被災地支援プログラム」を開催しました。３都市のＹＭＣＡから10～20代の若者12人が集まり、石巻にて被災地視察、仮設住宅の花壇整備と各国料理紹介、女川町での子ども遊び場プログラム、高齢者グループホームでの文化紹介などの活動を行いました。多数の児童が犠牲となった大川小学校を訪問した際には、あまりの惨劇を目の当たりにして口を手で覆い、涙ぐむ姿も見られました。炎天下での花壇整備では、７月にとちぎＹＭＣＡから来たアメリカ人高校生ボランティアが植えた花壇の雑草取りと水やりを行いました。休憩時間には仮設住宅の住民の方々から冷たいお茶とお赤飯、お漬け物がふるまわれ交流のひとときとなりました。

各国料理紹介では、台北ＹＭＣＡユースは卵とトマトの炒め物、ソウルＹＭＣＡユースはチヂミ、東京ＹＭＣＡユースは白玉ぜんざいを作り、石巻地域では珍しい各料理は大好評でした。毎食前には、各ＹＭＣＡ持ち回りでその国の言葉で食前感謝のお祈りをし、就寝前には一日の振り返りの時を持ちました。寝泊りをしたＹＭＣＡ石巻支援センターでは、ふとんを並べてアジアにおける過去の歴史と現在の関係について語り合う場面もありました。

震災後３年目にして東アジアに連なるＹＭＣＡユースが相互に交流し、石巻での現地活動ができたことは「支援」を超え、ＹＭＣＡ運動の一歩を大きく踏み出すことができた出来事でした。

原発問題、領土問題、歴史認識等々多くの課題を抱えながらも、ＹＭＣＡのつながりが民間外交の大きな役割を果たす時だと感じました。またその原動力は未来を担うユースにあると確信する今回のプログラムでした。参加したユースが石巻で見て、汗を流し、肌で感じたことを自身のＹＭＣＡでの活動につなげていってもらえたらと願っています。東京ＹＭＣＡのユースも９月18日に事後研修を行う予定です。

＊「ＳＴＴ」は、１９７８年から２年に１度持ち回りで開催され、共通する課題などを協議しています。２０１２年秋にソウルで行われた協議会で、ユースによる東日本大震災被災地支援プログラムが提案され、今回の実現に至りました。

（会員事務局　村上祐介）

仮設グループホームあゆかわの郷では各国の紹介や歌、体操などを披露。入居者との交流も楽しんだ

「卵とトマトの炒め物」を料理する台北のユースたち。石巻の皆さんには「珍しい」と好評だった。

仮設住宅で韓国の伝統的な体操を披露。石巻の方々も一緒に挑戦した。

仮設住宅の花壇の手入れ

夜の話合いでは、一日の振り返りのほか、歴史認識の問題など様々なディスカッションが行われた。

<< 参加者アンケートより >>

●ボランティア活動が、こんなにも意義深く、幸せを運ぶものであることを知りませんでした。ここにいる全ての人が親切で、細かいところまで気を遣ってくれたことに感謝します。本当にすばらしい経験であったし、もう一度来たいと思います。
（Shim Yeon Woo　ソウル　大学生）

●ぜひまた来たいです。忘れることのできない、すばらしい体験でした。台北の人も日本の人もとても親切で親しみやすかったです。また、スタッフのお話を聞いて、日本人のイメージが変わりました。うまく言えませんが、本当にありがとうございました。
（Park Eun Hye, ソウル）

●この7日間は、私にとって宝物です。ＳＴＴプログラムが毎年開催されて、この幸せをもっとたくさんの人とシェアできればいいのにと思います。（Mei Chun Chou、台北、大学生）

●各国の学生から多くの刺激を受けたと同時に台湾や韓国についてもっと知りたいと思いました。そして、政治的な問題や歴史的な問題についても勉強しようと思いました。・・仮設住宅に住んでいる方々との交流がとても楽しかったです。「また来てね」という言葉がとても嬉しかったです。
（池田有花、東京、大学生）

●ボランティア活動をするたびに、いかに私が震災のことを忘れかけていたか、そして未だに苦しんでいる被災者の方々の苦悩を無視していたかを思い知らされました。台湾・ソウルの学生たちと日本で起こった悲劇の傷跡を共有できたのはとても良い経験でした。彼らと日に日に仲良く、そして絆が深まっていくのを感じました。この友情はおそらく私の一生の財産になると思います。
（加茂愛弓、東京、大学生）

●惨憺とした被災地を見た時、とても胸が痛かった。初めて訪問した日本が、困難を経験していることに対してやるせなかった。
・・・このような国際交流で世界がお互いに協力し合ったならば、すばらしいことが生じて、大きな痛みにも打ち勝っていけると思います。韓国と日本とのどんな政治的、歴史的な偏見をも捨て、心のきれいな人々と知り合うことができ、本当に幸せです。また再び会う時まで、いつも幸福で、お互いにすばらしい仕事をし、良い人生を過ごしたいと思います。ＳＴＴのこと、皆さんのこと、絶対忘れません。（Lee Min Kyung、ソウル、大学生）

●とても貴重な体験ができました。このように、お互いの国で起きたことを知り、助け合うということは、とても意義深い活動だと思います。・・・　皆さんのおもてなしに感謝します。ここで生まれた関係を大切にしたいです。皆さん、一緒にがんばりましょう。
（張以俐、台北、大学生）

夏の復興支援活動

■　洗足学園音楽大学生　石巻でミニコンサート

8月14日から16日まで、洗足学園音楽大学の私のゼミの学生9名が、石巻でささやかな活動をさせていただきました。高齢者デイサービス施設と仮設住宅の集会所で、2回の小さなコンサートを開催。また、周辺の被災地の視察もしました。今まで遠い現実だった大きな震災が、学生達にとって一気に近いものになったようでした。現在学んでいる音楽が、色々な形で、多くの方の心に届くことを実感できた時間だったと思います。感謝です。
（理事　　飯　靖子）

■社会体育・保育専門学校（石巻小学校　水泳指導）

昨年に引き続き、東京ＹＭＣＡ社会体育・保育専門学校生たちが石巻小学校で水泳指導ボランティアを実施した。3日間の水泳指導を3期（Ⅰ期：7月24-26日、Ⅱ期：7月29-31日、Ⅲ期：8月19-21日）の予定だったが、Ⅰ期はあいにくの天候で水泳指導は1日のみとなり、代わって学習支援を実施した。参加学生は14名で、各期100名前後の小学生たちと交流が持て、とても充実したボランティア体験となった。
（社会体育・保育専門学校　佐治克彦）

■医療福祉専門学校（子ども支援プログラム）

学生・スタッフ計10名が、8月11日から15日、石巻市内で子ども支援プログラムを行った。
プール遊びでは、おんぶや水中じゃんけんのリクエストが絶えず、学生達は筋肉痛と日焼けでへとへとになりながらも全身で応えていた。室内では、紙トンボや革のブレスレット、お菓子タワーを作って遊んだ。子どもたちが笑顔で楽しむ姿に、学生たちは自信をもらい、充実した時間を過ごした。一方で、笑顔の裏に隠された震災による悲しみを覚え、自分にできることについて思いを寄せるきっかけとなった。（医療福祉専門学校　桑原もえみ）

■国際ホテル専門学校　被災ホテルでワーク

7月17日～20日の3泊4日で震災復興ワークキャンプを行った。学生12名・講師2名・卒業生3名とスタッフ7名、総勢24名が参加。ホテル学校としては、これが8回目のワークキャンプになる。今回は、学生たちの専門性を活かし、震源地に近い牡鹿半島の先端で被災したホテルの客室やキッチン等の清掃を行った。また、移転したばかりの高齢者グループホームの庭整備も実施。高齢者との交流の時をもつことができた。卒業生3名は初参加。現役の学生たちは、先輩と一緒に汗を掻き、夜には仕事の話も聞くこともでき、貴重なひと時をいただく。次回は来年2月を予定。継続して行いたい。　　（国際ホテル専門学校　小畑貴裕）

■リフレッシュキャンプ

「ＹＭＣＡリフレッシュキャンプ」は、今夏も下記日程で開催し、福島の親子118人を招待した。このキャンプは、三菱商事㈱の協賛により、2011年度からこれまでに37回実施。参加者は延べ1400人以上になった。昨年からは、シティグループ・ジャパン・ホールディングス㈱も協賛くださっている。

参加した親子は、豊かな自然の中でボランティアリーダーたちと遊び、また参加者同士で情報交換するなどして、束の間のキャンプを満喫された。

日程	開催場所	参加人数
7月13日－15日	妙高高原ロッジ	40人
7月19日－21日	東山荘（御殿場）	40人
8月30日－9月1日	山中湖センター	38人

総主事・シニアスタッフ研修

アメリカＹＭＣＡ変革の先

財務部主任主事　菅谷　淳

７月17日～25日、日本ＹＭＣＡ同盟主催の総主事・シニアスタッフ米国研修に参加させていただいた。私を含めて全国から9名が参加した。

米国ＹＭＣＡは現在、拠点数2600、会員数2000万人と、全米最大のＮＰＯとなっている。フィラデルフィアで開催されたGeneral Assembly（全米ＹＭＣＡ大会）には、スタッフ、ボランティア、レイパーソン4000人が集まり、まさに圧巻であった。この大会は3年に1度開催されており、今回は“Connect, Educate, Inspire（つながり、学び、奮起）”をテーマに、各界の著名人による基調講演や、さまざまなセミナー、トレーニングが実施された。（＝写真）

4000人が集まった全米ＹＭＣＡ大会

米国ＹＭＣＡは2007年、「社会は自分たちをどのように見ているか」ということについて大規模な調査を行った。その結果、ＹＭＣＡの意義や目的が十分に外部へ伝えられていないことがわかり、2010年から戦略的にブランドが統一された。伝えるべき目的は、次の3つとした。①青少年育成、②健康な生活、③社会的責任である。また、他宗教および多様な文化との共生を図るため、キリスト教を基盤としつつも、それを前面に出さない方針がとられ、ロゴは上記のように、ＹＭＣＡの通称である”The Y”に統一された。この全米大会の期間中にも、祈りや讃美歌が少なかったのは少々寂しかった。

この「ブランドの再構築」のため米国ＹＭＣＡ同盟は、スタッフトレーニングにも力を入れている。週１時間のダンスのインストラクターでも、自分の教えていることはＹＭＣＡの伝えるべき上記３つの目的のどれに該当し、自らのプログラムを通じて何を達成していくのかを受講生に説明できるよう、トレーニングを受ける。

また「ＹＭＣＡエクスチェンジ」という州を越えた全米の内部構築サイトがあり、人材を一元的に管理している。ＹＭＣＡのスタッフやボランティアはここにアカウントを持ち、職務内容、資格、研修受講履歴などが閲覧できる。

米国ＹＭＣＡ同盟は今回の変革を、成功であると評価している。ローカルＹの満足度も変革前と後では50％から90％と飛躍的に伸びたという。しかし、日本のＹＭＣＡはこれをどう捉えてどの部分を役立てていくか、単に真似をすれば良いということでなく、入念な検討と議論が必要であると感じた。

「カヤック&カヌーキャンプin野尻湖」

かけがえのない夏休み

今夏も、東京ＹＭＣＡのキャンプやスクールに、約3000人余の子どもたちが参加しました。たくさんの体験と仲間との出会いが、良き思い出となり、成長の糧となっていくことを願っています。

「キッズワールドカップin 韓国」中国、台湾、韓国、日本から小学生約100人が参加。歓迎式ではサッカーグランド型の巨大ケーキが登場。４カ国の子どもでケーキカットしました。

「戸隠ネイチャーアドベンチャーキャンプ」やまびこがこだまする「小鳥ヶ池」で

「つるじんの工作スクール」壁画絵。グループみんなで協力して”動物ジャングル”を描きました。

↑「山中ビレッジキャンプ」富士山に向かって出発！

ＩＣＣＰＪ（International Camp Counselor Program Japan）。台湾の学生たちが1ヶ月間、山中湖センターと妙高高原ロッジでボランティアをしながら、日本語を学びました。

「Camp Erdman in ハワイ」キャンプ、ホームステイ、サーフィン、英会話、どれもドキドキ大冒険でした。

ユース・コンボケーション
英語で語り尽くす5日間

ワイズメンズクラブ国際協会では、青少年の育成のため、例年「ユース・コンボケーション」を開催。各国クラブから推薦されたユース代表が集まり、生活を共にしながらディスカッションなどを行う。今年の参加者に感想を聞いた。

中央大学ＹＭＣＡ　藤永嵩秋

フィリピンで7月31日から8月4日まで5泊6日、ワイズメンズクラブによる「アジア・ユース・コンボケーション」に参加して参りました。参加国は日本とフィリピンの2か国とＩＹＲ代表のバルバドス人1人という小規模で行われましたが、得た同士と経験は計り知れないくらい大きいものでした。

文化交流での出し物では、私が忍者衣装を着たことが好評で見事1位に選ばれました。観光として訪れたタール火山では、乗馬の機会もあり、地球の偉大さと美しさの一部を感じました。

３つの基調講演をとおして「己の存在を見つめなおし、Spirit・Mind・Body（精神・知性・身体）そしてHeart（思いやり）を持って取り組むこと」の真意を学び、私のグループでは自分らの夢について語り合うことが出来ました。まさにユースエンパワーメントそのものといった講演でございました。

別れてからもSNSを通して今でもずっとやり取りを続けております。このような機会を与えて下さったワイズメンズクラブとＹＭＣＡにお礼申し上げます。

通信制高校サポート校「東京ＹＭＣＡ高等学院」
14年4月開校へ　準備本格化

東京ＹＭＣＡは２０１４年４月、通信制高校サポート校「東京ＹＭＣＡ高等学院」を山手コミュニティーセンターの中に開校します。

すでに少しずつ準備が進められてきましたが、いよいよ9月からはガイダンスなど具体的な広報を始めることになりました。山手センター1階に専用スペースを設け、電話も開通しました。ご興味ある方、知人に通信制高校を検討されておられる方がいらっしゃいましたら、担当の井口真へご連絡ください。

電話０３－３２０２－０３２６　iguchi@tokyo-ymca-or-jp

すべての人を一つにしてください
平和を証する者として

「私たちはキリストの平和を生き、証する者として、以下の事柄を表明し求めます。（1）私たちは在日外国人や民族的少数者に対する憎悪と差別を煽る言動に反対する立場を表明し、他者の生命と身体に対する直接の危害を扇動する言動を直ちに中止することを求めます。（2）私たちは日本が既に批准している人種差別撤廃条約に基づき、憎悪・差別的言動の被害者救済を含む人種差別撤廃・人権擁護のための早急な法整備を求めます。」（日本キリスト教協議会常議員会２０１３年７月11日）

９月１日は日本の防災の日として、防災訓練などが各地で開催されています。１９２３年９月１日の関東大震災にちなんでの防災の日です。その時多くの方々が犠牲になりました。しかし同時に忘れてはならないのは、多くの朝鮮人の方々が虐殺されたという事実です。今年も９月２日に東京ＹＭＣＡと在日本韓国ＹＭＣＡ合同の早天祈祷会がもたれ、悲しい過去が繰り返されています。

冒頭の文章はＹＭＣＡも所属している日本キリスト教協議会（ＮＣＣ）の声明文の一部です。「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」（新約聖書『マタイによる福音書』５章９節）という聖句があります。私たち自身が平和を作り出す人になりたいと思います。

（総主事　廣田光司）